

5回目接種をアピールする岸田総理

コロナワクチン 「不都合なデータ」

- ▶ 「追加接種」推進の陰
- ▶ 一体何が起きているのか… 接種後死亡
- ▶ 「接種者」の方が「感染者」になりやすい不
- ▶ 一流科学誌『サイエンス』に「自然免疫を抑制」という論文
- ▶ 季節性インフル並みに下がった致死率

ワクチン「データ」徹底検証

特集

- ▶ で「超過死亡」増加の謎
- ▶ 亡1908件を「評価不能」で逃げる政府・厚労省の怠慢
- ▶ 思議
- ▶ を抑制」という論文
- ▶ 今こそ考えるべき「追加接種」「子どもへの接種」の是非



いつまで打てばいいのか……

「このケースすら『評価不能』とする厚労省は文章を読む力が欠如しているのかと疑ってしまいます。妻子を残して逝った彼の無念ははかりしれない。厚労省がα（因果関係が否定できない）を意地でも出さないのは、大ごとになるのが嫌だからという事に尽きるでしょう」（同）

「ワクチン死亡疑い例」がこれまでに2000件近く報告されていることと関係があるのかどうかは定かではないが、注目すべき別のデータもある。ワクチン追加接種率と「超過死亡」の関係だ。超過死亡とは「例年より増えた死亡者数」を指し、それが今年上半期に急増していることは次頁のグラフで一目瞭然である。また、ワクチンの3回目接

「4回目の接種は今年5月に始まったので、10週後にまた超過死亡が増えるのでは、と思っていたら、やはり8月になって超過死亡が増えています」

言うまでもなく超過死亡を押し上げる要因は一つではなく、コロナによる死亡者数もそこには含まれる。例えば、今年2月の死亡者数は前年同月と比べて1万9490人増えている。コロナによる死亡者数は43

例えれば昨年11月、28歳の至って健康な男性が2回目のワクチンを打った5日後に急死。死因は心筋融解（横紋筋融解症）による急性心不全で、解剖を実施した法医学教授は「コロナウイルスワクチン接種関連」と推定した。

場合に医療費や死亡一時金などが支給される「予防接種健康被害救済制度」が存在する。この制度では厳密な因果関係は求めておらず、コロナワクチンに関してもすでに死亡一時金の請求が認められたケースが現時点で15件ある。

「まず、コロナ感染の初期である2020年は超過死亡ではなく、死者が例年より少なくなる過少死亡となりました。ところが去年、1回目、2回目のワクチン接種の時期と前後して超過死亡が起り、3回目接種が去年末頃から始まると、それから10週ほど経った今年の2月や3月に超過死亡が増えています」

そう語るのは、長年小児がんの研究、治療に携わってきた名古屋大学名誉教授の小島勢二氏である。

「大ごとになるのが嫌」

比べても各死因の割合は大体同じになります」

つまり、最終的な死因にばらつきがなく、同じことが同じシチュエーションで起こり続けている、ということ。ちなみに、死因の半数近くを占めるのは血管系

障害と心臓障害である。「こういったデータがあるにもかかわらず『評価不能』というのは、もはや犯罪だと思っています。これらのデータを見れば、医療関係者ではなくてもワクチンと死亡の関係が疑います」（同）

「まず、コロナ感染の初期である2020年は超過死亡ではなく、死者が例年より少なくなる過少死亡となりました。ところが去年、1回目、2回目のワクチン接種の時期と前後して超過死亡が起り、3回目接種が去年末頃から始まると、それから10週ほど経った今年の2月や3月に超過死亡が増えています」

政府は目下、国民全般への追加接種に加え、5歳～11歳の小児、生後6カ月～4歳の乳幼児にまでワクチン接種を推奨している。ワクチンに「光」の面しかないものであれば、それで良い

「11月25日、新型コロナウイルスワクチンの5回目接種を率先して受けた岸田文雄総理。しかし、政府が盲目的にワクチン接種を推進するウラで、『不都合なデータ』が次々と明らかになっていくのか。政府・厚労省が目を背けるそのデータは何を物語るのか。」

「厚労省が公表しているデータが私を調べたところ、ワクチン接種日の翌日に亡くなっている方が最も多く、その後、日がたつにつれて少なくなっていくことが分かります。これは、ワクチンを打った部分が腫れて治まって……という副反応の経日変化とはほぼ一致します。しかも、別の期間の集計を

これらはワクチンが持つ「光」の面に過ぎない。

「高年齢者が死ななくなれば、コロナはただの風邪になる」——そうした専門家の声を本誌は繰り返し紹介してきたが、ワクチン接種によって高齢者の重症化率、死亡率は確実に下がり、いまやコロナの致死率は「インフルエンザ並み」にはなつた、というわけだ。

これは11月11日までに医療機関またはワクチン製造販売業者から報告された、国内でのワクチン接種後の死亡事例数である。ただし、これはあくまで厚労省に報

「厚労省が公表しているデータが私を調べたところ、ワクチン接種日の翌日に亡くなっている方が最も多く、その後、日がたつにつれて少なくなっていくことが分かります。これは、ワクチンを打った部分が腫れて治まって……という副反応の経日変化とはほぼ一致します。しかも、別の期間の集計を

無論、その要因としてはウイルス自体が弱毒化していることが挙げられるが、ワクチンの接種が寄与しているのも間違いなからう。

「高年齢者が死ななくなれば、コロナはただの風邪になる」——そうした専門家の声を本誌は繰り返し紹介してきたが、ワクチン接種によって高齢者の重症化率、死亡率は確実に下がり、いまやコロナの致死率は「インフルエンザ並み」にはなつた、というわけだ。

「厚労省が公表しているデータが私を調べたところ、ワクチン接種日の翌日に亡くなっている方が最も多く、その後、日がたつにつれて少なくなっていくことが分かります。これは、ワクチンを打った部分が腫れて治まって……という副反応の経日変化とはほぼ一致します。しかも、別の期間の集計を

「厚労省が公表しているデータが私を調べたところ、ワクチン接種日の翌日に亡くなっている方が最も多く、その後、日がたつにつれて少なくなっていくことが分かります。これは、ワクチンを打った部分が腫れて治まって……という副反応の経日変化とはほぼ一致します。しかも、別の期間の集計を

44人増えた一方、自殺者数は148人減って……と様々な要素を加味したとしても、やはり「不明な要素」によって増えた死亡者が月間1万数千人はいる、ということになるのだ。

見解を出しました。しかし、これは1回目、2回目接種の時の話で、3回目、4回目接種の時の話ではありません」(同)

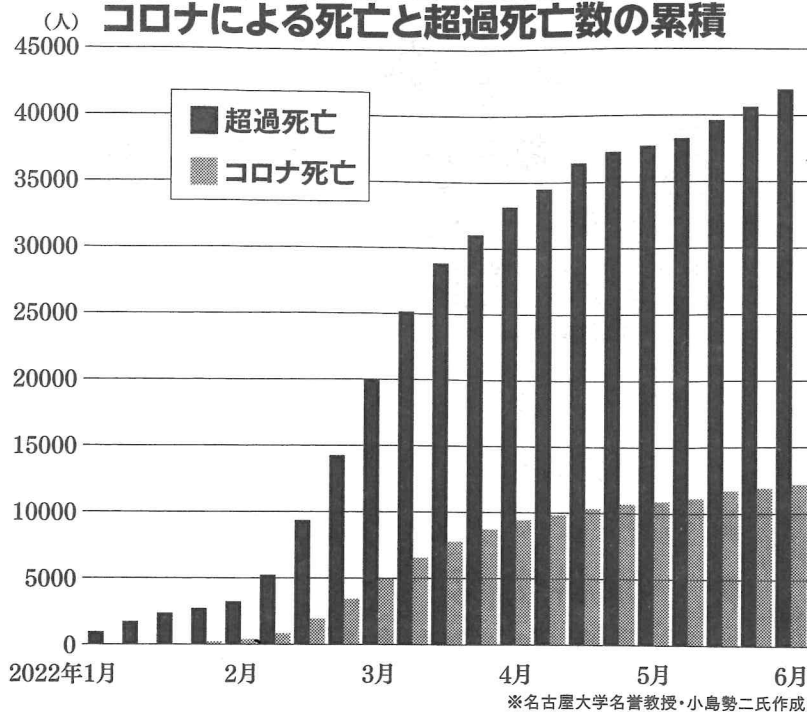
過度な自粛や巣ごもりが影響した可能性もあるが、これについてはデータがないので検証不能である。

多くの国で同じ事態が…

「厚労省は今年2月、超過死亡の発生とワクチン接種の関係ありません、という」

「アジアだけでなく、ヨーロッパではどうかと調べてみたところ、今年8月、EU27カ国中、26カ国で超過死亡が発生していました。しかも、平均すると12%の増加でした」

2022年上半期に日本で観察されたコロナによる死亡と超過死亡数の累積



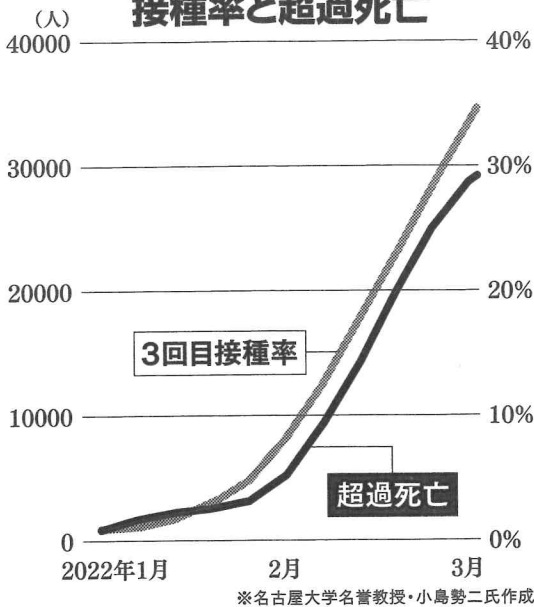
「自殺に関しては、超過死亡はほぼ発生しておらず、医療逼迫によりがんで死んだ可能性も、割合から見れば決して高くない。つまり、コロナを除いた7割から8割の超過死亡の原因がよく分からない、ということになり、そこを調べるのが大事だと思います」

「今年2月〜3月の、全超過死亡に占める死因別の超過死亡の割合を見ると、大阪はコロナ感染による超過死亡が40%ですが、鳥取や島根では5%ほど。全国で見ても、コロナ感染が占める割合は3割に過ぎません」(同)

「ニュージールランドは日本と同じように20年は超過死亡が出ませんでした。また、1回目のワクチン接種でも超過死亡は増えなかったのですが、追加接種を行うと、途端に超過死亡が増加しています」(同)

「この論文では、人が元々持っている自然免疫をコロナワクチンが抑制するという可能性を指摘しています。ワクチンを打ち続けると、コロナに対応した抗体ばかり作るようになり、様々な

日本における3回目ワクチン接種率と超過死亡



「世界各国のワクチンの追加接種率と超過死亡とは相関関係がありそうでしたので、日本の各県における65歳以上の4回目ワクチン接種率と超過死亡の相関関係を検討しましたが、相関は見られませんでした」(同)

「この論文では、人が元々持っている自然免疫をコロナワクチンが抑制するという可能性を指摘しています。ワクチンを打ち続けると、コロナに対応した抗体ばかり作るようになり、様々な

「多くの年代で、未接種者より2回目、3回目接種者

「厚労省は今年2月、超過死亡の発生とワクチン接種の関係ありません、という」

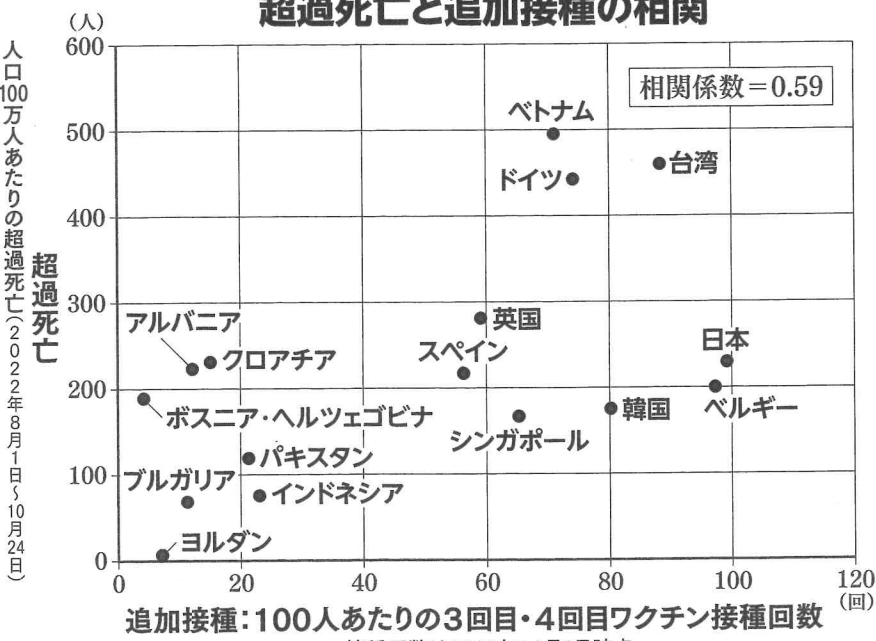
「多くの年代で、未接種者より2回目、3回目接種者

「多くの年代で、未接種者より2回目、3回目接種者

「多くの年代で、未接種者より2回目、3回目接種者

「多くの年代で、未接種者より2回目、3回目接種者

超過死亡と追加接種の相関



※接種回数は2022年11月1日時点 ※Our World in Data から名古屋大学名誉教授・小島勢二氏作成

	未接種			2回目接種済み (3回目接種済みを除く)			3回目接種済み		
	新規陽性者数 (8/22-28の 合計)	未接種者数 (8/28時点)	10万人 あたりの 新規 陽性者数	新規 陽性者数 (8/22-28の 合計)	2回目 接種者数 3回目 接種者数を除く (8/28時点)	10万人 あたりの 新規 陽性者数	新規 陽性者数 (8/22-28の 合計)	3回目 接種者数 (8/28時点)	10万人 あたりの 新規 陽性者数
0-11歳	117,767	10,580,959	1113.0						
12-19歳	19,101	2,210,864	864.0	29,324	3,244,042	903.9	22,502	3,477,170	647.1
20-29歳	23,533	2,398,235	981.3	39,888	3,925,132	1016.2	57,389	6,399,546	896.8
30-39歳	21,556	2,834,187	760.6	36,453	3,791,073	961.5	63,290	7,670,104	825.2
40-49歳	17,774	3,183,699	558.3	32,298	3,796,609	850.7	79,697	11,375,715	700.6
50-59歳	11,291	1,191,835	947.4	16,939	2,296,826	737.5	76,591	13,275,891	576.9
60-64歳	3,019	605,852	498.3	3,500	530,483	659.8	29,996	6,261,687	479.0
65-69歳	2,069	1,061,712	194.9	1,907	326,124	584.7	25,415	6,696,686	379.5
70-79歳	3,238	856,614	378.0	2,548	527,702	482.8	43,083	14,810,316	290.9
80-89歳	2,131	17,673	12057.9	1,847	360,889	511.8	25,719	8,649,082	297.4
90歳以上	1,028	—	—	781	121,887	640.8	10,700	2,281,917	468.9

※第98回新型コロナウイルス感染症対策アドバイザーボード(令和4年9月7日)から本誌が作成

夢の続き

望外の成果に感涙し、勝利に酔い痴れたところで、すべての夢には必ず終わりがやって来る。あとに待ち受けるのは、紛れもない現実の姿に他ならない。それでも我々は、うつつへと引き戻される狭間で「夢の続き」を追い求めて彷徨う。今週は、そんな数々の物語をお届けする。

3度目の優勝を狙う

栗山監督の呼び掛けに応じて待ジャパンに参加表明した大谷翔平(28)だけではない。パドレス・ダルビッシュ(29)も、

サツカーはW杯16強止まりでも、野球となればWBCを2度制した実力国。もともと、直近2回は優勝から遠ざかっており、雪辱を果たすべく、日本代表の栗山英樹監督(61)は、最強メンバークををかき集めている。だが、その一方で心配の声も――。

大谷「ダルビッシュ」鈴木誠也 「栗山ドリムチーム」の陰に WBC後遺症「リスク」

ツシユ有(36)に続き、今月8日にはカブス・鈴木誠也(28)も出場を決断したのである。

「最近2回の大会で出場したメジャーリーガーは、青木宣親(現・ヤクルト)だけだ。大谷は言うに及ばず、ダルビッシュと鈴木という投打の主軸を揃えることができたのは大きい」(スポーツ紙デスク)

さらには国内からも、史上最年少三冠王を達成したヤクルトの村上宗隆(22)や、13者連続奪三振を成し遂げたロッテの佐々木朗希(21)らが名乗りを上げている。

「松坂大輔、イチロー、城島健司ら5名のメジャー選手を擁し、優勝を果たした2009年以後の強力な布陣です。日ハム時代に、師弟関係」を結んだ大谷、ダルビッシュだけでなく、鈴木まで口説き落としたり栗山の「人望」に各方面から称賛が集まっています」(同)

病気に対応するための免疫力が落ちてしまう。これは「抗原原罪」と呼ばれる現象で、体が「コロナ特化型」になってしまふ、ということ。しかもコロナウイルス自体も変異していきますからね……」

上記表内のワクチンにはオミクロン株に対応していません。その上、接種によって自然免疫が抑制されてしまったため、ワクチン未接種者より接種者のほうが、新規陽性者数が多くなった――そんな仮説も考えられよう。

「唯一救いがあるとすれば、80歳以上の場合、感染率が劇的に下がっていることで(上の表参照)。おそらく、そもそも高齢者は自然免疫が低いため、ワクチンで抗体を作ったほうが感染しにくいのでしよう。それ以下の年代だと、自然免疫が落ちてしまうため、むしろ感染しやすくなる可能性がある。つまり、高齢者にとってはワクチンは一定のメリットがある、と言えるわけです」(同)

高齢者にとってメリット

あるのは間違いないが、果たしてそのワクチンを全年代の国民が追加接種する必要があったのか。福島氏はそんな疑問を投げかける。「刻々と変異し、弱毒化していくウイルスにワクチンで対処するのはナンセンスですが、国が走り出したらどうしようもない、ということが今回、よく分かりました。戦時中と一緒で、少しでも異論を唱えたら、反ワク」扱いです。私は反ワクではありませんが、厚労省に対しては、ワクチンに関するデータがこれだけ出てきているのだから、事実を謙虚に受け止めてほしい、と言いたいです」

厚生省医薬品等行政評価・監視委員会委員長代理で、東京理科大学薬学部薬学科学准教授の佐藤嗣道氏も、「政府は、長期的なリスクが分からないなかでワクチンを推奨したので、これから本来は接種を始める前に未知のリスクの可能性について丁寧に説明すべきでした。ワクチン後遺症などさまざまなリスクが指摘されている現在はおさらです」

とした上で、ワクチンとの向き合い方について次のように語る。

「今後、コロナによる死亡や重篤な状態に陥るリスクはさらに下がっていくと予想されます。そうした状況の中で、政府はワクチンの効果とリスクに関する情報を偏りなく国民に開示し、接種のメリットとデメリットを一人一人が判断できるようにしなければなりません」

さらに、ワクチン接種の努力義務についても、「国民全員に課す段階は終わりにしてもよいのではないかと考えます。海外では、今後は国としてワクチンを積極的に打つことを推進しないところが増えていきます。コロナだけを特別扱いするのを止める方向に動き出しているのです」

そんな中でワクチンをつか打たないか。政府の見解を垂れ流すだけの新聞・テレビ、ワクチン推進派と反対派が罵り合っているだけのネットをいくら眺めていても、その「答え」は見つかるまい。

勝つためのチーム作りとしては上出来である。ところが、ここである不安が頭をもたげているという。

「WBC後遺症」と言われますが、大会に出た結果、シーズン開始直後から調子を崩す選手が多いのです」

とは、大リーグ研究家の友成那智氏。今回は来季3月8日から21日にかけて開催され、その9日後にはメジャー開幕を迎えるのだが、「選手はピークをWBCに合わせて消費し、国を背負って戦えば消耗します。イチローも09年に胃潰瘍になりましたし、松坂に至っては右肩の疲労や股関節痛の悪化で、計4カ月間の欠場を余儀なくされました」

実際、ダルビッシュも出場決断まで時間を要した理由について、

「オフを短くし、調整を前倒しにすることへのリスクが高いという判断(があっ

と、自身のブログで記すなど、危険性を認識している様子なのだ。

一番の心配は大谷

とりわけシーズンへの影響が心配されているのは、他ならぬ大谷で、「大谷は今シーズン166イニングを投げ、自己最多の219奪三振を記録しました。一方、バッティングの方ではシーズン中盤までに34本塁打を量産しましたが、終盤に失速して9月12日以降は1本も打っていません。二刀流による疲労が主な原因でしょう。それだけ二刀流は疲れるわけで、彼の将来を想えば、WBCでの起用法はよく考える必要があります」(前出・友成氏)

前出のデスクはこう言う。「日本はダルビッシュを筆頭に投手陣は揃っています。栗山監督は大谷の二刀流起用を示唆していますが、彼の疲労なども考慮に入れば、基本的には投手ではなく、打者で使うのが理に適っている。その上で安定感



ダルビッシュ有Twitterより

週刊新潮

12月22日号
440円

記事の
ラインナップを
WEBで公開中!



49

